

# AHPによる大阪大学のシンボルに関する研究

三道 弘明

キーワード：シンボル，大阪大学，AHP

本稿は、藤本 幸奈さん、吉竹 梨穂さんによる2014年度大阪大学経済学部懸賞論文優秀賞を受賞したゼミ卒業論文をもとに加筆修正したものです。

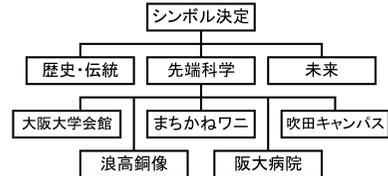


図1 階層図

## 1. はじめに

シンボルとは、直接的に知覚できない概念、意味、価値などを、それを連想させる具体的事物や感覚的形象によって間接的に表現すること、また、その表現に用いられたものことである。大阪大学は、キャンパスマスタープランに基づいたシンボリック空間の形成を行っている[1]。キャンパスマスタープランは、アンケート調査結果のほか、学内関係者による議論や、建築、都市、環境デザインの専門家による調査検討を基に2005年(平成17年)に策定された中長期的なプランである。建物の形態や自然、周囲の風景との関係、人の活動、歴史やメッセージなどを総合的に繋ぎ合わせながら、シンボリックな空間を育てていくことを目標としている。

しかし、大学が数多くの整備を行ってもなお、大阪大学にはシンボルがないという声をよく耳にする。これは、空間をシンボルにしようとしているキャンパスマスタープランがうまく機能していないからかもしれない。大学側と学生側が考えるシンボルにずれが生じている可能性も考えられる。空間という抽象的なものではなく、建物や銅像、記念碑など、容易に理解できる具体的なものをシンボルにすべきではないだろうか。

本研究ではこのような考え方に基づいて、大阪大学の学生へのアンケートを実施し、AHP(階層分析法; Analytic Hierarchy Process)[2-5]を用いて分析することで、学生の目線から見た大阪大学にふさわしいシンボルは何かについて考察を行う。

## 2. 分析方法

本研究では、AHPを用いて、大阪大学にふさわしいシンボルを考える。その手順は次のとおりである。

- (1) 階層化
- (2) 一対比較
- (3) 重要度計算
- (4) 総合評価

本研究での最終目標は、大阪大学に最もふさわしいシンボルの決定である。評価基準は、「歴史・伝統」、「先端科学」、「未来」の三つ、代替案は「大阪大学会館」、「浪高銅像」、「まちかねワニ」、「阪大病院」、「吹田キャンパス」の五つとする。図1にその階層図を示す。これら評価基準の設定の詳細については紙数の関係上省略する。

アンケート被験者は大阪大学に通う全学部の学生である。調査期間日時は2014年10月30日(木)から11月18日(火)までの約3週間である。合計119名分のデータを回収したが、そのうち整合性が取れたものは63名分であり<sup>1</sup>、この意味で有効回答率は52.9%である。なお、有効回答のキャンパスに関する内訳は、豊中キャンパス22名、吹田キャンパス24名、箕面キャンパス17名であった。

## 3. 分析結果

調査結果を次の2通りの方法で分析した。

- (1) 被験者それぞれの総合評価を1位から5位まで順位づけし、1位となったものが多かった代替案を求める方法

さんどう ひろあき  
関西学院大学 総合政策学部  
〒669-1337 兵庫県三田市学園2-1

<sup>1</sup> 整合度を測るCIの値が0.1以下となったもの

表1 キャンパス別多数決法の人数内訳

代替案	豊中	吹田	箕面	合計
大阪大学会館	9	4	1	14
浪高銅像	1	1	1	3
まちかねワニ	4	2	3	9
阪大病院	6	6	8	20
吹田キャンパス	2	11	4	17
合計	22	24	17	63

(2) 被験者全員の総合評価を平均して1位を決める方法

以下では、前者を「多数決法」、後者を「平均法」と呼ぶこととする。

多数決法を採用した場合、キャンパス別の人数内訳は表1のとおりである。表より、それぞれの代替案を1位として選んだ人数は、「大阪大学会館」14名、「浪高銅像」3名、「まちかねワニ」9名、「阪大病院」20名、「吹田キャンパス」17名であり、多数決を採用した場合には「阪大病院」が大阪大学のシンボルとして最もふさわしいといえる。

なお、平均法を用いた結果も多数決法と同様、「阪大病院」が大阪大学のシンボルとして最もふさわしいといえる結果になった。

#### 4. 考察

はじめに、キャンパス別の結果について考察する。多数決法では、豊中キャンパスの学生は「大阪大学会館」を大阪大学のシンボルとして最もふさわしいと考えているといえる。一方、吹田キャンパスの学生は「吹田キャンパス」を、箕面キャンパスの学生は「阪大病院」をふさわしいと考えている。このように多数決法を用いて分析すると、大阪大学のシンボルに最もふさわしいと考えられている代替案は、キャンパスごとに異なるものであった。

しかし平均法では、豊中キャンパスの学生は「阪大病院」、吹田キャンパスの学生は「吹田キャンパス」、箕面キャンパスの学生は「阪大病院」を、大阪大学のシンボルとして最もふさわしいと考えていることが明らかとなった。つまり、吹田キャンパスの学生だけが、ほかの二つのキャンパスの学生と異なる代替案である「吹田キャンパス」を選択していた。

次に、詳細は省略するが、平均法で求めた各代替案を評価基準別に分解し、各代替案においてどの要素がどの程度重視されて評価されたのかに注目した。その結果、箕面キャンパスの学生は、ほかの二つのキャンパスの学生と比較して、「阪大病院」と「吹田キャン

パス」に関して、「先端科学」と「未来」の評価基準の値を非常に大きく評価していることがわかった。これは、箕面キャンパスの大阪大学としての歴史がほかの2キャンパスに比べて浅いがゆえに、大阪大学の「歴史・伝統」に対する意識が低く、相対的に「先端科学」と「未来」が高くなったとも考えられる。このため、全体のアンケート結果が、ほかの2キャンパスよりも箕面キャンパスの特徴から影響を受けている可能性が示唆された。

#### 5. おわりに

以上を踏まえ、本研究では大阪大学の学生が考える、大阪大学にふさわしいシンボルは「阪大病院」と結論づける。

大学はキャンパスマスタープランに基づき、空間をシンボルにしようと考えている。本研究では、多数決法でも平均法でも、空間である「吹田キャンパス」という代替案が2位に選ばれており、これは大学側の方針を全面的に否定することはできないことを示唆していると考えられる。しかし、1位として選ばれたのは「阪大病院」であり、学生の意見を反映したアンケート結果からは、やはり、空間という抽象的なものではなく、具体的事物をシンボルにすべきであると考えられる。このような結果を踏まえ、具体的事物、特に「阪大病院」を大阪大学のシンボルとするよう大学側に提言したい。

なお課題としては、次のことが挙げられる。

20年後、30年後に同じアンケートを実施したときに、同じ結果が得られる保証はない。外国語学部は、大阪外国語大学が2007年に大阪大学に統合されて設立された学部である。それゆえ、大阪大学としての歴史も浅く、歴史・伝統に対する意識が低いと推測できる。しかし、今後年数を重ね、歴史を積み重ねたとき、外国語学部の学生が持つ大阪大学に対する意識は大きく変化しているであろう。そのとき、本研究とは異なった結果になることが推測できるため、いかに対応するかが重要である。

#### 参考文献

- [1] 大阪大学施設マネジメント委員会、「大阪大学キャンパスマスタープラン：個性と魅力にあふれた阪大キャンパス像—ダイジェスト・成果編—」, 2012.
- [2] 木下栄蔵, 『意思決定入門』, 啓学出版, 1992.
- [3] 八巻直一, 高井英造, 『問題解決のためのAHP入門: Excelの活用と実務的例題』, 日本評論社, 2005.
- [4] 高萩栄一郎, 中島信之, 『Excelで学ぶAHP入門(初版)』, オーム社, 2005.
- [5] 武田正則, 大迫正弘, 『はじめてのAHP』, 工学社, 2008.